

## 理解や配慮が必要な疾病

疾病等により様々な症状が現れているにもかかわらず、まわりの人から「怠け」「気持ちの問題」などと理解を得られず、学校に登校しづらくなる事例が報告されています。

本人や家族も疾病とは思わず、医療機関を受診していないことも考えられるため、配慮等が必要な疾病について理解を深め、適切に対応することが大切です。

### 配慮のポイント

- 教職員が各疾病に関する理解を深める。
- 児童生徒に思い当たる症状等がみられた場合には、医療機関への受診を勧める。
- 保護者や主治医と連携して必要な配慮事項を確認し、教職員の共通理解のもと、対応する。
- 本人・保護者の了解を得た上で、他の児童生徒に説明し、理解を求める。

#### 起立性調節障害

キーワード：朝起きられない 体調不良や遅刻の増加

- 自律神経の働きの不調のため、起立時に身体や脳への血流が低下することで、様々な症状が出る。小学生の5%、中学生の約10%に存在するとされている。
- 症状：立ちくらみ、めまい、動悸、朝起き不良、無気力、思考力低下、慢性疲労等
- 対応：学校医やSCと相談するなどして、医療機関の受診を勧める。  
規則正しい生活、水分補給、無理のない範囲での運動などを心がける。



#### 脳脊髄液減少症

キーワード：起立性頭痛（起き上がると強くなり、横になると軽くなる）  
頭部打撲等の外傷

- 頭部打撲や転倒等により、脳・脊髄を浮かべている「脳脊髄液」が減ることで、様々な症状が出る。
- 症状：起立性頭痛、めまい、ふらつき、全身のだるさ・疲れやすい等
- 対応：学校医と相談するなどして、医療機関（脳神経外科、脳神経内科）の受診を勧める。  
臥床安静（横になる）＋水分補給（1日1～2リットル）が重要。



#### 慢性疲労症候群

キーワード：日常生活が困難なほどの強いだるさ等が続く  
休養しても回復しない

- 症状：日常生活が困難なほどの強いだるさ、微熱、リンパ節腫脹、頭痛、睡眠障害などの症状が、6か月以上の長期にわたって続く。
- 対応：思い当たることがないのに上記の症状が続く場合は、学校医と相談するなどして医療機関の受診を勧める。



#### 色覚異常

キーワード：色を見誤る  
色覚による制限を設けている資格・職業がある

- 先天色覚異常は、男子の約5%（20人に1人）、女子の約0.2%（500人に1人）の割合にみられ、色によって見分けにくいことがあるため、色を見誤ったり、色を使った授業の一部が理解しにくいことなどがある。
- 対応：色覚異常の児童生徒がいる可能性があることを前提として、赤、緑、青などのチョークは避ける、グラフなどは、パターン模様や凡例を併する、等の配慮を行う。（参考資料「学校における色覚に関する資料」（公益財団法人日本学校保健会）

